川崎医療福祉学会誌　Vol. 34　No. 1　2024　47－55

原　著

青年の対人関係における過敏性が自己表現を介して本来感に及ぼす影響

中川紗耶加[*1]　福岡欣治[*2]

要　　約

本研究では，青年における対人関係過敏性が自己表現と対人関係の良好さを介して本来感に与える影響を検討した．質問紙調査により男性120名，女性258名の大学生から有効回答を得た．多くの変数において有意な男女差がみられたことをふまえ，性別による多母集団同時分析を行った．その結果，男女に共通して，対人関係過敏性は非主張的表現および間接的表現と正の関連を示し，男女で少なくとも一方は本来感を有意に減じていた．また，対人関係過敏性は対人関係の良好さおよび本来感と直接に負の関係があった．一方で，対人関係過敏性からアサーティブな表現への影響は有意ではなかった．しかし，アサーティブな表現は対人関係の良好さを通して間接的に本来感を高めていた．男女で異なる結果として，対人関係過敏性は，男性では非主張的表現，女性では間接的表現を促すことで本来感に負の影響を与えていた．女性では，対人関係過敏性は攻撃的表現を抑制し，本来感に負の影響を与えていた．本研究は，対人関係に過敏な現代青年が不適応的な自己表現をおこないがちであること，それらの改善が対人関係をよりよいものにし，また本来感を感じやすくすることにつながることを指摘する．さらに、対人関係に過敏であってもアサーティブな表現は可能であり，その改善によって本来感を高めることができることを示唆する．

1．緒言

1．1　現代青年のコミュニケーションに見られる過敏性

近年，インターネットを通じたコミュニケーションが増えており，対人関係が多様化している．また，ソーシャルメディアなどを介した自己表現の場が増えたり,「多様性」という言葉が頻繁に使われ，その人らしさがより尊重されるようになったりしている．多様なあり方が認められるという点では，現代は以前と比べて生きやすい時代であるといえる．しかし，価値観の多様化は必ずしもその融合に向かわず，互いの相違を顕在化させる可能性がある．土井[1)]は，現代の若者の間で，クラスのような集団が類似度の高い小グループに細分化される一方，それぞれのグループ内で完結する人間関係の中では，互いに関係の傷つけを慎重に回避する「優しい関係」が展開されていることを指摘している．他方，ソーシャルネットワーキングサービス（SNS）が普及した現在は，匿名性の高さゆえに時として攻撃的な書き込みが行われることも1つの特徴である．実生活上は互いに知り合いであっても，インターネット上では匿名の存在となって相手を傷つけることも可能である．そのような状況の中で，現代青年は，他者との関係について過敏で，対人関係に悪影響が及ぶことを避けようとする傾向が高く，本来の自分の考えや気持ちを抑えて行動する青年も少なくないと推測される．青年は，子どもから大人あるいは学生から社会人へと移行し，自身を取り巻く環境が大きく変化していく時期にある．その中にあって，自己のあり方がある程度確立されていることは，主体的な自己決定を行い，物事を円滑に進めるために役立つと思われる．しかし，対人関係に過敏な傾向をもつ青年にとって，自己を偽ったり抑えたりするコミュニケーションが，自己確立や自分らしくあることを

＊1 元 川崎医療福祉大学　医療福祉学研究科　臨床心理学専攻（2023年度修了生）
＊2 川崎医療福祉大学　医療福祉学部　臨床心理学科
（連絡先）福岡欣治　〒701-0193　倉敷市松島288　川崎医療福祉大学
E-mail : fukuoka@mw.kawasaki-m.ac.jp

妨げるとすれば，それは今後の人生を送るうえで看過できない問題になると考えられる．

1．2　対人関係における過敏性

他者との関係における過敏さの概念として，「対人関係過敏性（interpersonal sensitivity）」がある．これはBoyce & Parker[2]によって「他者の行動や感情に対する過度で極端な意識と感受性」と定義されている．彼らによれば，対人関係過敏性の高い人は，他者との関係にとらわれその行動や気分に注意が向き，特に批判や拒絶に過度に敏感であって，それらを最小限にするため他者の期待に沿うように行動を修正する．そして，彼らによってこれを評価するInterpersonal Sensitivity Measure（IPSM）が開発され，うつ病との関連が検討されている．この尺度は巣山ら[3]によって日本語版（J-IPSM）が作成され，精神疾患を有さない日本の健常大学生を対象に，疾患を有する人に特異的な特性でなく青年期に主に見られる一般的傾向としての対人関係過敏性を測定することが可能となっている．なお，巣山ら[3]は日本語版の作成にあたり，対人関係における過敏性について「他者からの拒絶を心配して予期し，すぐに知覚し，過剰に反応する傾向」[4]を示す「拒絶に対する過敏性」と，他者から拒絶されることに対する不安という点でほぼ同義のものである[5]という視点を採用している．そして，巣山ら[3]はこの尺度の得点について，対人的傷つきやすさや抑うつの得点とそれぞれ強い正の関連があることを報告している．このように，対人関係における過敏性は，抑うつに代表される不適応に対する危険因子であり，またその定義から自由な自己の表現を妨げることが予測される．

1．3　自己表現

良好な対人関係を構築していくうえでは，自己も他者も大切にするコミュニケーションが重要である．平木[6,7]は，他者と関わる中での自己表現として，「非主張的表現」，「攻撃的表現」，「アサーティブな表現」の3つを挙げている．平木[6,7]による「非主張的表現」は，自分の気持ちや考え，意見を表現せず，相手を優先する表現である．伝えられないことによる不快な体験を我慢し続けると，心身症やうつ状態になったり，人付き合いが億劫になったりすることがある．「攻撃的表現」は，自分の意思や考え，気持ちをはっきりと言う一方，相手の気持ちを無視または軽視する表現である．他者を傷つけたり他者から敬遠されたりして，相手との関係が悪くなりやすい．「アサーティブな表現」は，自分の気持ちや考えなどが率直に，その場にふさわしい方法で表現され，同時に相手の自己表現の権利と自由も尊重する表現である．また，この3つに加えて安藤[8]は，自分の主張を嘘やまわりくどい言い方で間接的に伝える「間接的表現」があるとしている．これは，主張の必要性は高いが親密度の低い相手に対し，相手の様子をうかがいながら自分の意図を伝えるために用いることが多いと考えられている[8]．内山[9]は，日常生活全般を通じて行われる個人の表現方法の選好を測定するものとして，先述の3つの表現と間接的表現の計4つの下位尺度からなる自己表現尺度を作成した．この尺度で測定されるそれぞれの自己表現は，長期的な精神的健康や対人関係のあり方を予測することにもつながると考えられている[9]．

1．4　本来感

自分らしくある感覚を表す概念として，「本来感（sense of authenticity）」がある．本来感は「自分自身に感じる自分の中核的な本当らしさの感覚の程度」と定義され，大学生を対象とした研究において，人生における目的や自律性，積極的な他者関係などの心理的well-beingの下位因子に対して正の影響を与えるなど，精神的健康に対して促進的な影響を及ぼすことが確認されている[10,11]．また，本来感は自分の責任で選択していくことや，自分の新しい可能性へと踏み出そうとする意識，現状の自分を改善させていこうとする意識にとって重要な内的資源であることが示唆されている[12]．さらに，本来感と自分を表現する対人的関わりは正の関連，人との関わりを避けたり過度に人の目を気にしたりする関わりは負の関連がある[13]．加えて，過剰な外的適応行動は本来感に負の影響を及ぼすことが報告されており[14]，周囲の他者からの被受容感が本来感の形成に関係していることも示唆されている[15]．これらのことから，本来感は他者に対する自己の表現によっても，また実際の対人関係によっても影響を受けることが考えられる．

1．5　本研究の目的と仮説

自己確立の時期とされる青年期において，自分らしさの感覚は重要である．自己表現の如何によって本来感が損なわれるとすれば，今後の生き方や精神的健康にも関わってくる．他方，対人関係における過敏さは特性的であるが，他者との関わり方としての自己表現はより変化させやすい．これらの前提に立ち，本研究では，青年期の大学生を対象として，対人関係における過敏性が自己表現を介して本来感に及ぼす影響を，対人関係の良好さも含めて検討することを目的とする．

本研究の仮説モデルを図1に示す．これは，対人関係過敏性は非主張的表現及び間接的表現に正の影響を与え，それらの表現がより多くおこなわれてい

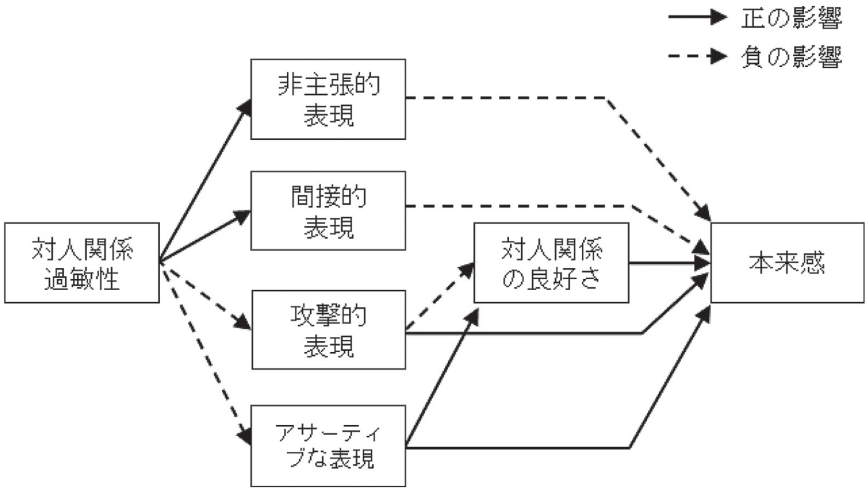

図１　本研究における仮説モデル

る場合は本来感に負の影響を与える一方，対人関係過敏性はアサーティブな表現及び攻撃的表現に負の影響を与えるが，それらの表現を行えているならば本来感に正の影響を与えるというものである．また，アサーティブな表現及び攻撃的表現は，良好な対人関係の構築にそれぞれ正／負の影響を与え，その結果として本来感に影響を及ぼすと考えられる．非主張的表現及び間接的表現は，相手に配慮して他者との関係を維持することや悪化させないことを意図する表現であるが，自己を適切に表現するものではないため，より良好な対人関係の構築には直接につながらず，本来感の維持向上にも寄与しないと想定される．

２．方法

２．１　被調査者

私立大学に通う30歳未満の大学生に対して質問紙調査を行い，408名分を回収した．そのうち不同意であったものや記入不備のあったものを除き，378名（男性120名，女性258名；年齢の平均±標準偏差は19.4±1.2歳）分のデータを分析対象とした．

２．２　測定内容

２．２．１　対人関係過敏性

Boyce & Parker[2]の Interpersonal Sensitivity Measure（IPSM）の日本語版である J-IPSM[3]を用いた．「誰かに怒られると，心が傷つく」「他の人に対して怒ることは難しいことだと思う」「他の人から自分がどう思われているか，心配である」「本当の自分を他の人に知ってほしくない」「良いことをしたと他の人に言われた時のみ，そう信じられる」等の計27項目からなる4件法（1. 全然あてはまらない～4. とてもよくあてはまる）の尺度であり，全体的傾向としての対人関係における過敏性を検討するため，分析時には合計点を使用した．

２．２．２　自己表現

内山[9]の尺度を用いた．「非主張的表現」（「無理なお願いでも断れない」等の6項目），「間接的表現」（「言いたいことは曖昧な表現で伝える」等の6項目），「攻撃的表現」（「話し合いでは友達の意見を聞かずに自分の意見を押し通す」等の6項目），「アサーティブな表現」[†1]（「言いたい事を言うときには，友達の話もよく聞くよう心がける」等の7項目）の4因子計25項目について，それぞれ5件法（1. 全くあてはまらない～5. よくあてはまる）で回答を求めた．分析時には4因子別に得点化して使用した．

２．２．３　対人関係の良好さ

日本の青年の対人関係に関する尺度を参考に，加藤[16]によって作成された尺度を用いた．「周囲の人達に受け入れられていると感じる」「私は友達ととても気持ちが通じ合っている」等の計6項目について，それぞれ4件法（0. あてはまらない～3. よくあてはまる）で回答を求めた．分析時には合計点を使用した．

２．２．４　本来感

伊藤と小玉[10]の尺度を用いた．「いつも自分らしくいられる」「人前でもありのままの自分が出せる」等の計7項目について，それぞれ5件法（1. あてはまらない～5. あてはまる）で回答を求めた．分析時には合計点を使用した．

２．２．５　個人属性

回答者の個人属性として，年齢と性別をたずねた．

２．３　手続き

2022年12月から2023年5月に実施された心理学関連の計7つの講義時に，それぞれの担当教員の協力

を得て，授業に支障がないよう講義前に各自取ってもらう形で調査票等一式（説明文書を含む）の入ったクリアファイルを配布した．実施に先立ち，調査への協力は自由意思に基づいており，回答しないことによる不利益は生じないこと，結果は統計的に処理されるため個人が特定されないこと，得られた調査票及びデータは厳重に扱われること，調査への協力が得られない場合は白紙のまま提出することができ，回答を始めても途中で止めることができること等を文書及び口頭で説明した．7～8分程度の時間を確保し，協力に同意した場合について回答することを求め，退室時に各自で調査票のみを提出するよう依頼した．なお，クリアファイルと説明文書は各自で持ち帰ってもらった．

３．結果

３．１　尺度の信頼性と男女差の確認

最初に，各尺度の信頼性係数及び記述統計量を算出した（表1）．その結果，各尺度の信頼性はいずれも高かった（α=.70－.93）．そこで，事前の想定に沿ってそれぞれの得点を算出し，以降の分析に使用した．

３．２　各得点の男女差

各得点の男女差を検討するため，対応のないｔ検定を行った（表2）．その結果，非主張的表現，間接的表現，アサーティブな表現の得点は有意に，また対人関係過敏性は有意傾向で，女性の方が高得点であった．他方，攻撃的表現と本来感は男性の方が有意に高かった．これらの結果から，以後の分析では男女差を考慮して検討を行うこととした．

３．３　変数間の相関関係

尺度得点間の相関係数を男女別に算出した（表3）．男女ともに，対人関係過敏性と非主張的及び間

表１　各尺度の信頼性と記述統計量

変数・下位尺度	*α*	*Mean*	*SD*
対人関係過敏性	.93	70.89	14.20
自己表現			
非主張的表現	.86	19.39	5.41
間接的表現	.86	18.09	5.38
攻撃的表現	.70	15.55	4.05
アサーティブな表現	.76	28.35	3.92
対人関係の良好さ	.84	9.74	3.93
本来感	.74	22.85	5.32

表２　各尺度の男女別記述統計とｔ検定の結果

変数・下位尺度	男性		女性		*t*	*p*	*Cohen's d*	差の95%信頼区間	
	Mean	*SD*	*Mean*	*SD*				下限	上限
対人関係過敏性	69.03	14.29	71.76	14.10	−1.74	.08 †	−.19	−5.84	0.36
自己表現									
非主張的表現	18.43	5.38	19.84	5.38	−2.36	.02 *	−.26	−2.58	−0.23
間接的表現	17.12	5.28	18.54	5.38	−2.43	.02 *	−.27	−2.58	−0.27
攻撃的表現	17.10	3.69	14.83	4.01	5.43	＜.001 ***	.58	1.45	3.10
アサーティブな表現	27.58	4.03	28.71	3.82	−2.57	.01 *	−.29	−1.99	−0.26
対人関係の良好さ	10.06	4.21	9.59	3.80	1.05	.30	.12	−0.42	1.36
本来感	23.19	5.87	20.97	6.32	3.34	＜.001 ***	.36	0.91	3.53

*** $p < .001$, * $p < .05$, † $p < .10$

接的表現との間に有意な正の相関が見られた．アサーティブな表現は対人関係過敏性とは有意な関連がなく，対人関係の良好さとは正の有意な相関を示した．本来感は，対人関係過敏性・非主張的表現・間接的表現との間に有意な負の相関，攻撃的表現・アサーティブな表現・対人関係の良好さとの間に有意な正の相関を示した．男女で異なる結果として，女性では，対人関係過敏性と攻撃的表現との間，非主張的表現及び間接的表現と対人関係の良好さの間に有意な負の相関があり，攻撃的表現と対人関係の

表３　男女別の変数間の相関係数

変数・下位尺度		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
対人関係過敏性	①		.61 **	.52 **	−.36**	.04	−.25**	−.62**
自己表現								
非主張的表現	②	.52 **		.54 **	−.38**	.15 *	−.19**	−.40**
間接的表現	③	.42 **	.53 **		−.45**	−.09	−.26**	−.52**
攻撃的表現	④	−.16	−.14**	−.19*		−.04	.18 **	.42 **
アサーティブな表現	⑤	.09	.17	−.10	−.03		.22 **	.14 *
対人関係の良好さ	⑥	−.26**	−.10	−.02	.08	.47 **		.48 **
本来感	⑦	−.55**	−.35**	−.30**	.19 *	.28 **	.46 **	

注）相関係数は左下が男性，右上が女性を示す．
** $p < .01$, * $p < .05$

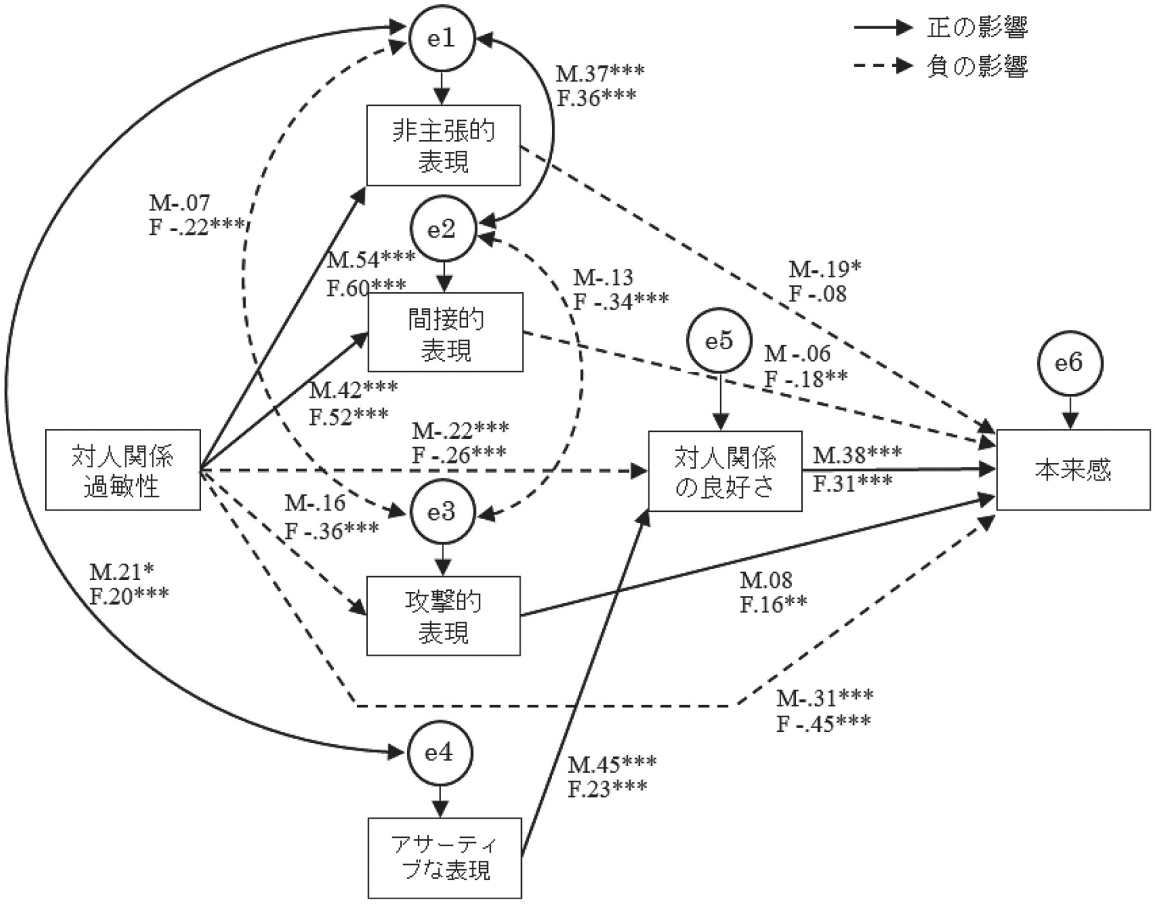

図２　多母集団同時分析の結果
Ｍは男性，Ｆは女性の結果を示す．***p<.001，**p<.01，*p<.05

良好さの間に有意な正の相関が見られた．しかし男性では，それらの変数間にいずれも有意な相関は見られなかった．

３．４　仮説モデルの検証

平均値および相関関係の男女差をふまえ，男女で群分けした多母集団同時分析による共分散構造分析を行った．最終的なモデルの適合度指標は，*GFI*=.980，*AGFI*=.921，*RMSEA*=.050，*CFI*=.982であり，十分な値であると判断した（図2）．その結果，男女ともに対人関係過敏性から非主張的表現及び間接的表現への正のパスが有意であり，また対人関係過敏性から対人関係の良好さと本来感への直接の負のパスも有意であった．男女で異なる結果として，対人関係過敏性は男性では非主張的表現を介して，女性では間接的表現を介して，本来感に負の影響を与えていた．そして，女性においては攻撃的表現が本来感に正の影響を与える一方，対人関係過敏性は攻撃的表現を抑制しており，その結果として本来感に負の影響を与えていた．また，男女で有意な差が見られたパスは，対人関係過敏性から攻撃的表現へのパスと，攻撃的表現および非主張的表現から本来感のパスであった．なお，男女ともに，対人関係過敏性からアサーティブな表現へのパスについて，有意な影響は見られなかった．さらに，アサーティブな表現から本来感へのパスにも有意な影響が見られなかったが，アサーティブな表現は対人関係の良好さを介して間接的に本来感に正の影響を与えていた．

４．考察

本研究の目的は，対人関係過敏性が自己表現を介して本来感に及ぼす影響を，対人関係の良好さを含めて検討することであった．以下では，本研究で得られた結果について，図1に示した仮説モデルとの比較，男女の相違点，それらをふまえた本来感向上への示唆，今後の課題について述べる．

４．１　分析結果と仮説の比較

まず，男女ともに仮説と一致する点として，対人関係過敏性が高い人ほど非主張的表現及び間接的表現を多くおこなうという正の関連が見いだされた．非主張的表現と間接的表現の間には男女ともに比較的高い相関があり，相関分析ではいずれもが本来感と負の相関を示した．共分散構造分析では少なくとも一方が，対人関係の良好さとは独立に本来感に対して有意な負の影響を及ぼしていた．これらは対人関係過敏性が円滑な自己の表現を妨げ，本来感に悪影響を及ぼすことを意味する．仮説に一致するその他の結果として，アサーティブな表現は対人関係の良好さと，対人関係の良好さは本来感と，それぞれ正の関連が認められた．これはアサーティブな表現を多く用いる人は対人関係がより良好であり，結果として本来感をより多く感じることができることを意味する．

他方，仮説と異なる男女共通の結果として，まず，対人関係過敏性は自己表現を媒介することなく，対人関係の良好さと本来感にそれぞれ負の影響を及ぼしていた．これは，抑うつの危険因子としての性質を指摘する先行研究（巣山ら[3]など）とも整合する，対人関係過敏性の負の側面を顕著に表していると考えられる．

自己表現との個別的関係では，対人関係過敏性は相関分析，共分散構造分析ともアサーティブな表現と関連していなかった．また，共分散構造分析におけるアサーティブな表現から本来感への影響は対人関係の良好さを介した間接的なものであり，直接の有意な関連は認められなかった．アサーティブな表現は，平木[6,7]の定義にもあるとおり，相手を尊重し，その場にふさわしい方法をとりつつ，自分の意思を率直に伝える自己表現である．対人関係に敏感である人は相手を傷つけないように配慮するため，率直でありつつも「ありのまま」ではない自己を自覚するかもしれない．なお，仮説と異なる他の結果として，攻撃的表現は対人関係の良好さと直接関連していなかった．攻撃的な表現は時に相手を傷つける可能性があるが，相手が受け入れてくれるという認知があれば必ずしもその実行は妨げられないであろう．なお，攻撃的表現については平均値および他変数との関連に後述する男女差が認められたことから，解釈は慎重であるべきとも考えられる．

４．２　男女で異なる点について

本研究では量的のみならず変数間の関連性において，いくつかの男女差が見いだされた．まず，攻撃的表現は共分散構造分析において男性では他の変数との関連が認められなかったのに対して，女性では対人的過敏性が高いほど攻撃的表現は抑制される一方，本来感に対してはこれを高める方向に作用する傾向が認められた．攻撃的表現の平均値は女性が男性より明らかに低く，女性では特に選好されにくい自己表現である．そして，その傾向は対人関係過敏性が高いほどいっそう強くなる．このような男女差に関連すると考えられる知見として，伊藤と小玉[13]の報告によれば，女性は男性よりも他者受容の傾向が高い．他者を受容しようとする場合，他者を傷つける可能性のある表現は手控えられるであろう．しかし，攻撃的表現は自分の意思や考え・気持ちをはっきりと表明する自己表現である[6,7]．それが実行できる人は相対的には少数派であるとはいえ，結果

として高い本来感につながる可能性があると考えられる．なお，男性の場合はもともと自らの行動や主張に自信をもち女性に比べて相手との考え方の違いを表明する傾向がある[17]．そのため，攻撃的表現を多く用いるからといってそれが本来感と直結しにくいのかもしれない．

その他の男女差として，ともに対人関係過敏性と関連する非主張的表現と間接的表現のうちどちらが本来感に影響するかが異なり，男性では前者が，女性では後者が本来感を妨げていた．両者はともに女性の方が男性よりも得点が高く，本来感とこれらの変数との関係は強いものではない．しかし，「非主張的表現」は相手に配慮するが故に自分の意見や考えを表明しないこと，「間接的表現」は嘘やまわりくどい言い方を用いつつ自分の意図を伝えようとすることを意味し，両者の意味は異なっている．なお「間接的表現」は親密度の低い相手に対し多く用いられると考えられることから[8]，その多用は相手を受容することとは結びつきづらい可能性がある．そこで，攻撃性の高さからもうかがえるように相対的に自己主張が直接的であり自他の違いを表明しやすい男性の場合には，それに反する「まったく自己の意見を表明しないこと」が本来感を妨げ，他者を受容しやすい女性の場合には，それに反する間接的な表現での自己表現を用いるほど本来感を妨げることになりがちであると考えられる．

４．３　自己表現からみた本来感向上への示唆

本研究は，他者との関係に敏感であり互いの傷つけを避けようとする現代青年においても自分らしさの感覚が重要であることを前提に，変容可能性の高いと考えられる自己表現に着目し，対人関係における過敏性が自己表現を介して本来感に及ぼす影響を，対人関係の良好さも含めて検討することであった．仮説との相違や男女の違いを含みつつ，その結果は，対人関係過敏性が「非主張的表現」「間接的表現」あるいは「攻撃的表現」と関連し，また直接にあるいは部分的に対人関係の良好さを減じることによって本来感を妨げることを示すものであった．これらの自己表現は他者への配慮あるいは傷つきへの恐れから自己主張を控えたり婉曲にしたり，あるいは配慮を欠いたまま一方的に主張するなど，いずれも不適切な側面を含む自己表現である．本研究は，このような自己表現は対人関係に過敏である青年にみられがちであると同時に，それらの改善が対人関係をよりよいものにし，また本来感を感じやすくすることにつながる可能性を指摘するものである．

加えて，仮説とは部分的に異なるが，本研究で見いだされたアサーティブな表現に関する結果は，特に重要であると考えられる．男女に共通して，アサーティブな表現は対人関係の良好さを促進し，対人関係の良好さは本来感と結びついていた．かつ、アサーティブな表現は，直接にあるいは対人関係の良好さを減じることで本来感を妨げる対人関係過敏性と関連していなかった．これは，対人関係に過敏であってもアサーティブな表現は可能であり，かつ対人関係過敏性の悪影響と拮抗するポジティブな影響を本来感に及ぼし得ることを意味する．アサーティブな表現はスキルとして身につけることが可能であり[6,7]，他者との関係に敏感な現代青年にとっても介入可能であると考えられる[18,19]．そして，それが自分らしくある感覚の獲得をもたらし，青年が今後を生きていくうえでの主体的な自己決定や，精神的健康の促進にもつながり得ると考えられる．

４．４　今後の課題

本研究は一時点の横断的研究であるため，変数間の因果関係を確定し得るものではない．このことに加え，測定上の限界として，個人が相手や場面に応じて自己表現を使い分けている可能性を考慮していない点が挙げられる．本研究では，内山[9]と同じく特定の場面ではなく日常生活全般での自己表現を扱い，対人関係過敏性がそれぞれの表現を介して本来感にどのような影響を及ぼし得るかを分析した．しかし，人は他者と関わる中で，特定のものだけでなく様々な表現方法を用いる．安藤[8]では，状況を読み取ったうえで表現を選び応用することが適切な自己主張であると指摘されている．また，現代青年が周囲に合わせ状況に応じて自己を切り替える「多元的自己」[20]の側面をもちやすいとされることを踏まえると，特定の相手や場面によって表現を使い分けているという視点を採用することなく，自己表現のもつ意味をさらに深く考察することは難しい．コミュニケーションの場が対面であるか，表情や声などが伝わりづらいオンライン上であるかということも含め，表現のあり方は異なってくると推測される．さらに，本研究では，本人が実際にどのような対人関係を築いているのか，どのような相手を想定して回答したかも不明瞭である．個人の対人関係のあり様について具体的に検討することで，本来感に影響する表現に関してより詳細なパターンや傾向を確認することができるであろう．したがって，今後は，相手や場面ごとの表現方法の違いが，本来感に影響を及ぼしているかを検討することが有益であると考えられる．

倫理的配慮

本研究における調査の実施に先立ち，川崎医療福祉大学倫理委員会の承認を得た（承認番号22-061）.

謝　辞

本研究の実施に先立ち尺度使用のご許可をくださった先生方，研究の遂行に際してご支援とご助言をくださった先生方，そして調査に参加し回答してくださった学生の皆様に，改めて深謝申し上げます．なお，本研究は第一筆者が2023年度川崎医療福祉大学医療福祉学研究科臨床心理学専攻に提出した修士学位論文に加筆修正を施したものであり，岡山心理学会第71回大会（2023年12月開催）において発表されています.

注

†1）内山[9]では「アサーティブ表現」とされているが，平木[6]をはじめ一般的にはこの表現が「アサーティブな表現」と呼ばれていることから，本稿では「アサーティブな表現」に統一して表記する.

文　献

1）土井隆義：キャラ化する／される子どもたち―排除型社会における新たな人間像―．岩波書店，東京，2009.
2）Boyce P and Parker G：Development of a scale to measure interpersonal sensitivity. *Australian and New Zealand Journal of Psychiatry*，23(3)，341-351，1989.
3）巣山晴菜，貝谷久宣，小川祐子，小関俊祐，小関真実，兼子唯，伊藤理紗，横山仁史，伊藤大輔，鈴木伸一：本邦における拒絶に対する過敏性の特徴の検討―非定型うつ病における所見―．心身医学，54(5)，422-430，2014.
4）Downey G and Feldman SI：Implications of rejection sensitivity for intimate relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*，70(6)，1327-1343，1996.
5）Harb GC, Heimberg RG, Fresco DM, Schneier FR and Liebowitz MR：The psychometric properties of the Interpersonal Sensitivity Measure in social anxiety disorder. *Behaviour Research and Therapy*，40(8)，961-979，2002.
6）平木典子：アサーション・トレーニング―さわやかな〈自己表現〉のために―．日本・精神技術研究所，東京，1993.
7）平木典子：アサーション・トレーニング―さわやかな〈自己表現〉のために―．3訂版，日本・精神技術研究所，東京，2021.
8）安藤有美：大学生における自己表現スタイルと場面特性との関連．カウンセリング研究，42(1)，50-59，2009.
9）内山有美：自己表現尺度の作成および信頼性と妥当性の検討．パーソナリティ研究，28(3)，247-249，2020.
10）伊藤正哉，小玉正博：自分らしくある感覚（本来感）と自尊感情が well-being に及ぼす影響の検討．教育心理学研究，53(1)，74-85，2005a.
11）伊藤正哉，小玉正博：自分らしくある感覚（本来感）とストレス反応，およびその対処行動との関係．健康心理学研究，18(1)，24-34，2005b.
12）伊藤正哉，小玉正博：大学生の主体的な自己形成を支える自己感情の検討―本来感，自尊感情ならびにその随伴性に注目して―．教育心理学研究，54(2)，222-232，2006a.
13）伊藤正哉，小玉正博：自分らしくある感覚（本来感）に関わる日常生活習慣・活動と対人関係性の検討．健康心理学研究，19(2)，36-43，2006b.
14）益子洋人：大学生の過剰な外的適応行動と内省傾向が本来感におよぼす影響．学校メンタルヘルス，13(1)，19-26，2010.
15）石原由美：思春期・青年期における周囲の他者からの被受容感と自己の「本来感」の関連．九州大学心理学研究，14，117-124，2013.
16）加藤司：対人ストレス過程の検証．教育心理学研究，49(3)，295-304，2001.
17）関口奈保美，三浦正江，岡安孝弘：大学生におけるアサーションと対人ストレスの関連性―自己表現の3タイプに着目して―．ストレス科学研究，26，40-47，2011.
18）堀川徳子，柴山謙二：現代の大学生に対するアサーション・トレーニングの効果について．熊本大学教育学部紀要，人文科学，55，73-83，2006.
19）安達知郎，安達奈緒子：大学新入生に対するアサーション・トレーニングの効果―適応感とアイデンティティ，自己受容に注目して―．教育心理学研究，67(4)，317-329，2019.
20）髙木由起子，廣瀬幸市：社会変化に伴う現代青年の特徴に関する一考察―多元的自己と「ネット的思考」の影響―.

愛知教育大学教育臨床総合センター紀要，11，27-34，2021.

（2024年5月2日受理）

Influence of Interpersonal Sensitivity on Sense of Authenticity through Self-expression in Late Adolescence

Sayaka NAKAGAWA and Yoshiharu FUKUOKA

（Accepted May 2，2024）

Key words : late adolescence, interpersonal sensitivity, self-expression, sense of authenticity

Abstract

This study investigated the influence of interpersonal sensitivity on sense of authenticity through self-expression and feeling of satisfaction with relationships in late adolescence. Valid participants of a questionnaire survey were 120 male and 258 female Japanese university students. Based on the significant gender differences in many variables, multi-group structural equation modeling analysis was conducted. In both men and women, interpersonal sensitivity related positively with submissive and indirect expressions and at least one of the two expressions in men and women decreased sense of authenticity. Interpersonal sensitivity also related negatively with good relationships and sense of authenticity. There was no significant path from interpersonal sensitivity to assertive expression. But assertive expression increased sense of authenticity indirectly through feeling of satisfaction with relationships. Interpersonal sensitivity related negatively to submissive expression in men and to indirect expression in women. Only in women, interpersonal sensitivity decreased sense of authenticity indirectly through negative influence on aggressive expression. This study suggests that late adolescents with interpersonal sensitivity tend to use maladaptive self-expressions but improvements to them can improve their relationships and increase sense of authenticity. This study also suggests that even interpersonally sensitive adolescents can express themselves assertively and increase sense of authenticity through its improvement.

Correspondence to : Yoshiharu FUKUOKA　Department of Clinical Psychology
Faculty of Health and Welfare
Kawasaki University of Medical Welfare
288 Matsushima，Kurashiki，701-0193，Japan
E-mail：fukuoka@mw.kawasaki-m.ac.jp
（Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.34，No.1，2024 47－55）